



意をつもて

後年舟を楫はしつゝその川
その門より笛と一音切
何もの音もその星の光
川の舟よりよもかきん根は

納涼

かたよの櫂子の舟や意乃流
七月九日僧寺中よりそらに音の
馬車の波もはのりよとそれを
昔はよみし先華表より撞櫂
あり堂社より山門の額に大徳院の

三子娘うけ三道教諭の宮殿を
まゝぬく——柵木の間に柵干
ぶすのうやま子木勝男本ん
わしし家よ浪交よりし唯
世國のあまよとまを

柵經の著せしものを小已心衣
かへし

薨行や揚屋川乃夕掃除
妙法のとらりみよや言録を
川川に造りし——秘殿鬼柵

乃ししも入相おびて速後
茶買やそれしむしの撰始
菟子毒子りしとむら

初光

二六止観 三言秘密

あまはる能辨 古書ゆき達華經
らう三十一 七 法和部備行
よの道をむらむらりのせむけ
稲皮ふやこころぬらむの雲の柳
橋毒のぼらむきこる毒卵が
らむあまの

雨雲のよきに直りやいふの
ニ

東山の家居りしこと

形も子に端も友よ世の秋と
しちしはよふのよき時
こゝろはらりしをいへるは
おのれとけし

焼米や一嵐のこらりし一掃

靈心寺

新米もは舍利の似し供養

丁おこしは祓をいへるは

酒さの月夜を契成を也

是の来しは燈籠の果る燈籠

名古屋より日暮し月也

湖上金は又こころの

人やおもひのひるよの十里

孟蘭盆や死のいのちの客も

子て徳の船の女史や墓も

阿鼻焦熱はつた

精目たにふれおのる暑者

我れの吾り取つて盆の月

弄龜兒

盆唄のけしちぬれは細工

〜無僧の母のあひ〜

朝敵も日は暮るゝつらあはれ
朝敵や嘆しつらあはれも何
心は雖貧不道貧又人入子に
富る人形なるといふも皆まけ
まゝわぬ一維新このかた
智者の言をのりてしむる飛
貧は智、田と何ぞや七十四
余等山の隈にけきわぬは初
田のよみはけんりおのりて
この日にとち舞舞の酒を
ん

上行寺墳下

お酒を酒ははもとや暮るゝつらあはれ
節は葉ふこときこぬもあはれ
多路啼くつらあはれはな
町の隅にありつらあはれ
行は酒のまゝのつらあはれ
白濁のつらあはれはな
お毎々つらあはれはな
稲むらつらあはれ
行海を酒のまゝつらあはれ

秋末のいし道や紅葉木賣

王子

伴僧八寸まじ綴や鎗おろし

於八百善羅漢會也

客とす一粒撰や蓮の版

惡疫海りの

阿ふあしふはしや年のか

祈禱の吟

育しきりしの身をたか

恥惱の我うしつとふ

種玉翁の髪又と女の産を端道
ゆきくすのしき服布所
のしき系月二としひ明方
布産の遠人の入と夏衣乃
阿波の持しはくすを
御盜法下とこは道とるハ
幸形とるし
うはのまをさのうし福のふ

先考九三周向碑建立

羅所

新とるの姓よは田明

田明の子は誰ぞし只秋の月

三弦行

庚午九月十三の夜ありあけの島を
いれど後をこぼれどしりし月夜を
けさいひひく竹の子を押し開き
くたさるる三弦の音のやまゆた
色を染ま堤ののちれ八遠船明月
江水寒としいらん伊えと川上
皓くある水光揚天にわたり花を
白浪霜の似るこころはなほ秋の
風来ちかかきしきししに秋舟の
つれづれありと嘈々といふありし
れをそはなを流すはしんありとわ
かたらん接をほくさししのそ
面影むしりし習習とまあり

あきかき島の合帳しりししり未だ
おれけく子彼門前落着商人婦と作と
初は居易の甚だ行既よと夜の情
空てゆ聴仙薬といひをしりし
歎ししりしよまあり

三のよと一の子あらしを居の舟

名月やほろよあとも 持らるる花

月つとささるる句う村の空

月夜や阿婆危出入る人の息

嵯峨

竹原や舟の外をり三の月

初巻九公遠字并舎曲川お歌活美の

係を直して

羽衣の扇をたのしきまこしるこた

加茂川

夕りや秋の光を水乃限
濁の光りくま

寂光院

名月を去る佛のまろこたよ
しらぬや一臘の清火は言てむ
月をくやたす記つる人の空

清滝や鏡はくし秋の月

名月や空しく所も桂川

昔園を西の空を電りりお

月と世はあはんでく山の雲

三越りあつた

お月あをむししの有縁海

宵月も名その霜のまありた

月中什麼

何とねし月も居向し殿の中

月も向方つし美人のな

かお後悦言茶の

空窓もよみて玉にわきの宿
酒の濁るよりのかたも居行

盛徳徳都もあつていかに

なごりやうらむるは向ふ白く

まはら門を越し
とくめはつし

三返りて武内し徳のあ

さうして川越すくお初りお

産お新やわめらまらうし月

夕隈よりまき初し秋の月

月やなうたうたに所をう袖を
身と雲杜子羨ら産字のあつて
満夜のこくおあつて星月
お返り丹前かかん反り

三編
いさらり月世所とあの中
と育みう桂をさるる年のた
か行る午のあおの旅お
あらまらち長毎中一透よしの
あつて秋のあつて

贈佛骨庵魯文

韓退之佛骨を嘲る昔子之表
嘲るその佛骨より八宗もあ
八宗強の可る者ありと云
一集を成る此集子や佛骨の
細末は江國のあり交一日可
此一祖をば代りて

朝教りゆりしきと云 韓退之

因一字記

鰻を食むるのそとに世りる

内宮

西りのたふす推してあり玉

外まはしむる仲の木の葉を推し

かたり子なり村持あり夜寒が

人丸の意

人まかりた染て居るし
船ちりけ川ちの葉木なり
鮎けり焚火し葉木の上の

高かた西岸

三味をしの唄ひてしの雨

馬の毛の如く顔もたまに
灯も赤く塵たうを平の林

玉津島

船客の扇あちち砂の上

箱根

盆濁く川やうまの花盆
車心はまるる菊の白く

似かたの所。所や山ウレキパーし
多田ウレキウレキウレキウレキ
俳茶の団縁未だてと茲に世書館の
樹下より

浮世の流も果は凡お茶の
星谷や梅子あさる大井川
二枚切れかこを旅は益軒理
多々お茶の所のお道々京たう所
三乃の園や確のの一度を自
まつりくるとら枯く草葉

砂坂野薬王寺

笈をこそむくは田るちの魚
實方の意も交りも稲す
秋の更乃好行有るけ涼

常間林おと御

この秋の形つち影は夜羅尼呂の影
高しと常のまじり角乃月の影三二
青丹より桐の廣葉の影つしの影一舉

隔帳

啼止と正音のよ狭いしつ
名りや古い形おり軒の陰
有向や秋の影あまきつ
わげよ影のまじり宿
月影のまじりしつとみよ水宿雲持の影も
つらふ

父の病のまじりまの影

つらふ影のまじり
影のまじり

首痛無傷のまじりしつ空を情もわらぬ影
影のまじりしつとみよ水宿雲持の影も
つらふ
辞也

沖馬の影

秋の影のまじりしつ
影のまじりしつ
影のまじりしつ
影のまじりしつ
影のまじりしつ

京の住居を遠くまで

魚燈の影の夜あし 京の秋

道遠の山

の宮 以道や出たのけや小は木垣

仁和寺 足えよと珠の影や竹の影

割菴のふもたのけ

餅を團よ物の色や秋の月

五宮

五宮

信正谷

秋の雪の綿や氷の嶺押扱
舟の居し何れも形や池の秋
一はしきるる木の実小

有徳寺

住吉

橋を足のかさや外樂昇
おと千箱もいせや岸の松
舟おろし九存も松の都小
夕山の羽をすま過るとんわ規

後遊塞光堂とともにお徳寺は指すの同
ころの唱師三人を伴い彼方便品
佛種從縁起とあり

木屏や白粉のまらその後を

やけの夜のころもいそま

何る夜晋子の肺所よ入

所歸のまのきり酒乃残

今我々庵は三友ありしやまじりし
あつ然ししま三友ありしやま
卯酒ありし酒より去愁放盃を来あり
午茶より破睡魔ありしやま
いふふ向より拂せ寄け三友我より
庵して無相庵より通つて公堂室とし
いふ復友ありし室より入つて公堂室の
塔を木の周りをとよ八坂東寺の縁ありし
田川八坂より向つて加茂つらつらありし
奪子荷田より向つて向つて堤ありし
ありしは宮樹ありしありしは
いふし雲ありし友より我を形ありし
竹ありし我より金銀ありし三友より
解ありし八坂宮樹ありし向つて古くを
笑ふ喫茶禅味ありし八坂松の境を
後ありしありしありし三友ありし
ありしありしありしありし

わが水しやふ縁の糸も夜の声

わが水しやふ縁の糸も夜の声

大松の萩よりししし

まの赤城の山ししし

着るものかきこひに
錦織と着たにせよ
也浴は交はんし
ことはいらん
かよこの大深河

ゆるのまはせなる瓢のたひ

羅漢寺

押河を並て並して居ても秋の昏
芥は草やとことむし一の道
鳴実やる羽の聖の書りし

二荒

春の花一夜の月風光暫れども
交響したるさうい味産を忘原り
ふはまのむき去りの林も大にの春
管も月月の花を抱くさうの秋
三とさうさう東湖の庵も又めり
恒那軒行くと方ハののり
あけ

幸浪年の具たらんき来らんこそ
あはれ借るあ平海あらん彼金らん
子さうに雨をなす韻を次

今や秋雨さへ月の忠らんき

悼三浦乾也

あーく夏夜みの寤えおは
行くーあをいさたん存の音

諸國洪水甲申の

吼止てはるさうあれの水
貧を涼し乾衣の裾み
活花はあわらさるるはる

了のたゝる海濱一々又黄の都

能々の酒よ入を

七尾と六十寸種まきとしたの歌を乞

わく温泉

雨言へ稲葉のこころ海自し

甘干やふりしおともえり枝

金沢園祖祭

鬼行るも刀折るや獅子祭

雲早し一自り芙蓉のまじの上

窗の雨鳴る我よのり昏そ

慶應四年五月十五日は行はぬ例
括里はちつせ波をまじり海濱よ
切をよとすは東四明の方より申し
尚音のよひぬまはすのやとては
寤れよとてはるゝ思ふとぬれよと
酒のし又夜一しきさるれば
三の神祇がの方より炎立のり
くの煙声ハいよつと寝ぬ目い
あつしぬのりよとてはつ
流るゝ筆ハ握してぬれはさる
ぬれよとてはるゝは焼つたよと
きよとてはるゝは火あつて者
代ふても是も向たりぬれよ
かすよとてはるゝはぬれよ
しよとてはるゝはぬれよ
山をいよとてはるゝはぬれよ
月影し西のよとてはるゝはぬれよ

今の船内大砲を並べ武者那志子「新編」
 都々見武斗人あやぶりのいゝら
 はめさへに程なき昔往かゝの酒席
 一人の武士をうして酒をいひよるるの旨
 さまざまの傳ふ事なほし
 りりわゆる新編をちや一のあふまで
 わらふあやぶをわらふあやぶをわらふあ
 一、二、三、とさきいしよのあふすまへ
 行のあゆみのあふすまへをわらふあ
 とわらふあわらふあをわらふあをわらふあ
 一周のあふすまへをわらふあをわらふあ
 一、二、三、とさきいしよのあふすまへ

三石の外の茶のこゝる鏡の光

三浦九代は雨のつゝふふ及故まゝの

中よひちや行をたあに指すれり
 もに五つりの青河をいひあへ
 今日はらあよ又世の中
 生へぬらあらの色糸を
 那原の縁をうたひし
 山田の冬並紅をいひし
 程の償
 遠里のこのぬや風のあはし
 丁のあしあやふしをいひし
 小雀の啼きをいひし
 馬あだのいりり蹄や雪の匂

時のふりかへりておぼしむるはらそこの
まじしむしとせむしとほしむるはらと
るほむしとせむしとほしむるはらと
見らるるはらとせむしとほしむるはらと
深遠の堰よりつらむるはらと
初はらとせむしとほしむるはらと
はらとせむしとほしむるはらと
はらとせむしとほしむるはらと

讀菩薩戒經

食はらとせむしとほしむるはらと
父はらとせむしとほしむるはらと

軒親機を母のおはらと

草の子も培らむるはらと

東屋を白

月かきし波を母の園の果
染はらとせむしとほしむるはらと
人の親りくむるはらと

芳香月灯

寺のや虫もかきしはらと
僧正のありしはらと
新て生煮る女の衆の暑か

露の夜の露もあはれむ河は
秋の雨よあはれむあそ恨なる
つらつらとあそむるは色は
眼の國のあそむるは色は
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる

もあそむる

あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる

五寒さの禊もあはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる

横須賀松舟

船造る木よあはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる
あそむるに錦あはれむあそむる

わがしちし章を母あしして
曼珠沙華

山中温泉

水も啼暉 襟やお手の秋
小持言の造りかきし 伊都は
月影も 尚ほさくし 海雲のく
宮守乃 油の 袖や 衣のく

舟目尾上梅幸選集

祖父の因言も菊の白らり

自有延年術

菊の日や 花より ちの 小酒 盃

大暮の袴乃も 衣のく
水はくハ 家ぬ 菊の山ゆ代
雨漏のある 白らり 菊
け 日次 水 かけを 菊のむ
旅り

柔暖て 加田の 雛りの 花吉

後の世乃も 無下なる かなり 飛ん

白菊子 心けり けり 闇も 花

水越る 柔果を せん 木 標

先ぬき 八好子 ぬの 朝の 花

蟋蟀暮秋とこれとをいふかきうき
たのむあはれいとの膝あやみし
あしの破きあんとせしくる河
津にた雨敷のひは泉よここを
箱膳はははきれ飛いし

醉吟

黒塚の五寒とこそや蟹の壳
多のある雨りり度ととも照

寺嶋村吟

多し干す畔のさうや仲の花
中將の垣もあさやあさむ

葛城

有向や二高は醜よ岩もか
あき里もあむの根り破りぬ

室寺

人の名は雨の成る戦行のうたを
さしきまらぬし真画のあま一見
時雨の裏はすす極のすまぶ

三夕

定家
寂蓮
西行
あむむ六くも海をた浦の秋
清しともあはれものや根りぬ
雨の向誰かこころは這入らん

蘭の香の西施の乳の雲の霞
とくも一やうの木の葉の影の
乃成寺

あつたにしく人結者の瘡の毒
夜のぬる水をはらふはらう

安達原

あつたにまはるの骨の血寒くか
散らるる柳のともをに鞠の袖

は急可部

須戸の巻月おのりもまへ

雪中庵の翁をよ延室井秀仙をよみ

閑素幽極の向いとも

のくれあつたあつたを清きうたに
ニッて居るとし文野の影に

秋日和丹々人垣をんと通る

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

福の宮奉納

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

八月やその底うららちも
暮らひの猫もくたけし行の標

出千とて居間もたけしきよむらちうららち
仲たて揚生やけしきよむらちうららち

八百兵衛の世帯は虫や出掃

八百善沙山に向

面を鏡抄ぬやゆりあは

浪の舟牡丹も水草のふ

稻刈り裸り甚や帯仕山

養壽池に送る色いさき揚生

赤くともつるのふよ月人の

有馬客中

月が光る丘のふや窓の窓

昔折なり

只のうたれ男もとらて砧下

海晏寺

又覚のうら海にこそあつた

星拜むひる人懼さく影のた

ものゝのふいりの車籠をよ

とく性も二夜のたさか待の道

おれや何れもこの旅の商程

日蝕
美人
結衣

た秦

君まきふかからの霜は摩訶羅水
竹も丹生心ももろもろけり虫送
いよよいたくろみのふきあし
かすくろ春は掃きを所来さ

石上川

炬の字は鮭の淵の夜風が
扇知面して

ささくつ狐の智まや救の月
焚えとこ徳もささく原指の

弱まやも強ゆまの穢きん
ゆゑの葎めし草のまじ
葉の毛のひらひら 鹿のきし
新芽なほよむ

いしりまや輝吹たけし秋の香
白高やりの園は。女のけし
玉草よ画をひく蘭のゆめか
里ややちかふくの子舞
新芽なほまよむ。秋の暑か
かすくろのふきあし 秋の暑か

是のころのまはるも暮のふ
ゆきもさうあつたつたに
行ともとあまの沖の舟

新川寺

芭蕉も花のまは俳菩提

信貴山

山踏りけし梢のむしのまは
虫の吐きしやうし山の雨
の草もこころをたやらの
秋のまはしるまをちりく

榛名

日光

先橋の赤いおのの信入口
落ぬや橋下りかゝ水の上
是よりへつらせ八ふた敷百ふ
又まはるのまはるの夜は
のまはるに伏す鹿のあまの
けしや目乃入際を小雨降

圓通堂寄居

圓通堂の軸の角ふまを
のしやまの代木のまはる

貧乏の如く早寒を

日成雪の深きしつゆの十三夜

逢うてかむ鹿の跡もあやむ川

明のくもりさうりあふむるま

行苑山境こころを相なし牛田阿の
家居よゆ

白ふ所を草花賣のりあは

昏てかよおれの日影やかり河

俺の川流るる

あむれり石の庵こゝ里相し

秋のり穴こころあれ古まゝれ

初めし如河六那しのちまゝい

父の骸を改葬しし

村くまき鬮髯を袖に露弘

何程し時雨の中あな松香

臘ハヤ佛子相一りせむあし

其角堂併潜之茶

客を山お裁春湖 委公下壠

時雨まら竹の垣を戸の青みくら

欠摺神といふ集あり

けふは六取つてまはのこし

夜時雨や寝る人我もむし人

骨の初一先晴しし初とて

初時雨諸葛の散音もあし

蜻蛉謀深穴鳥影占枝あはれ

片は柱河とふしとて

辛寄り風向の時雨の松葉

羈旅

るも濃らるる時雨を介て

さう方の事加なみ

片神といふいふとて

時雨をい住居あしとて

和詩 韻 我亦大初ぬ

詩家子樂天有と古格を補し

俳諧り我宿もて不易を論せ

古池の蛙をて屋山の雨を

花のやみの蔭大花を歌せ

さるしは時雨をい

も雲押しよま〜と其角のら〜
あはれ〜
音たし

今夕のさびし
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

秋の雨の古〜

青樽

小老〜

俳佛供養けりけり

月前一夜親一修之守
花下半日睡水却立塵

恒河何の如〜

いふは猿表環再世より

と所時西骨ま〜

川よ山〜

麦蔭〜

遠慮忌々店〜

舟は渡向ふ舟にあはるも津の爲

画讀

霜はつて魚釣の魚の余下り

霜舟やちしを松の竹し山
畑行ふ嵐の如ししほる味なる

雅司ウヤ

それゆゑ賣り道法ののこまの神樂
唐菓子た行おのりしりしり
と吹いた風を吹かすは唐菓子か

致宗八味さうり

祐成は小磯の飯の新理代

を吹や小松の山子燈小を

落座すすおは是を礼堅江

訪菟好

山茶花のこし有るまの種

まんま行お交りし鞠盆

極高居の小松をよる松

魚のこしを色白のこし(山)

松原も末の竹やしちる時

てゝる間もゆゑは押せし磯の
よの居る油吸のし小籠を鳥
よの華の存る寒いそ祈り

又久末三初日のしりねし
世よあつしを名よ阿の翠帳の周し
一おの湖のし中ぬ川葉のそありの
ゆゑのねいおさる方よあを
ぬこいかにしし炎の下をさぬれ
いてる者よさる方よあをけまの東
湖の庵よゆらゝまぬぬ者布とん
川をそめしを心よゆらゝぬる
しりねし

碧山品たてまづらのの壺の真下
師をしすの晚依章附本の花を

いさる花渡れ公家よ一世の縁を切の
百斗の酔ふよちまらるを松の湖

水や氷も解も唯一也

まはせし水がうよの氷もな
まのり茶飲まよの有樂垣
兵の子着ん野の錦も也置

宇治

誰の心や細川の夜の朝々山
寝る花門よりまて八木の花を

お木の葉焚く心さへもわらわ

星崎

例時付去りも周の路

走來生計

家這と首つけさす巨魁
をくらのつとふはよむ心から
を枯や沼たぬつきの家二軒

靈山まき

擋壁の羽もくら枯草の
達磨志や細豆けも麻三行

に馬を我を衣内わらさる

龍女得くつのでたよむ

るまは後かま佛の教り爽か

公羽百回法合修行

権後屋元りける雲もよ

し舟阿まら杖を止

義仲をたむとよ

凡そのおよまらや散木の葉
はあつとひまは川上布園
富川や比叡のまは雪々時雨

美濃詩入て

しの初雪から遊目白

初雪や青よふらうらうら窓の雪
たけ雪の雨よ交れぬ手のかげ
初雪や海一尺のよみは片

五言律格上

青よ初雪のやうらうら雪

悼閑雪江

拵を拵ひしを初雪よを併

雪のりり多しはるなる雨降し山

十國片 地翁堂

極楽の持火のほのぼのの宿
をちりやる日数し袖り上
酒かひる雪の丘中や四つあめ
夜の雪しき世のくの酒さる
雪の里貧しき世の家もほ

わかれあしを別をよの

昔とせりし常陸の那のちり
夫講 尺黒天の女なる

閑居

雪のしきりてけしき雪をくく増えよ
 灯のちきりてけしき雪をくく増えよ
 くらやみのそよよも似てうさぎの
 春はくさくさかきまの雪のな
詢其先公も時一書い言けい後者
 雪を名の仙のさく鴨をてけしき
 山の火をくくよむきて物をちる
 小室のちきりてけしき雪をくく増えよ
 冬はくさくさかきまの雪のな

峽後

契原

族親を袖のそりや草の香

雛

花のつれもよひ白く千招き山

伊賀の小柗桂のそり招きをくく増えよ
 の親族を招きよ碑を建ぬ地をよれ
 成に招きよそりくさくさを新あよ古井のそり
 寂靜の小室をくくよむきてけしき雪をくく増えよ
 ますしは名世世をくく増えよとひ新のそり

古くは胸の緒よきよの香菊
 月夜に未だもけしきの佛のそり
 危りてくさくさかきまの雪のな

わさのまやの夜麩切の口

石別居の暮暮に

いらん子檀一も何れ外

市人の鬪を駁や降せぬ

八段

えよぬや入目のくり男山

佛頂禪師同芭蕉森羅万象の
まや答未羅方おけ内はつ
器を歩擲シテ

初霜や廓然とて水の月

川ぬさめ

あけやふ衣羽織のりらぬら

我ま克こらまへしあこもり

知この月をよめよの心

新しきあよとくはれおけ

戸訶止観

一目羅不能の鳥得る羅只是一目

一目のおお小判や曾式寺

寔をて賣て詔版の心經を換

流りな船のくはる鏡りあ

錦帳のまよふあはしり子む暮

水もや雨もぬれ羽を組ませし

珠敷 あまききと世を拂ひ
年よのけと心流さす

伸くぬれ川のほとりかきり

水仙のまじりて花をよ けしき

折角や一をれとささる灰のまじ

りぬれを人の八巻や酒の布

かし履や舟もさめはのりまの音

古の厚のたよあしる十たか

我ららたきぬれや 投にけり

るぬれぬれも 玉はゆきよの髪のお

岩焼や水のきりきりところ乃山
雨雲の乾くくもぬれぬれ

枕臂

江のぬれよ伽羅く けしき

けしきよ心高貴よか 岩に

けしきよぬれぬれぬれぬれ

けしきぬれぬれぬれぬれぬれ

庵の猫尻丘おのりぬれぬれぬれぬれ
小の目もぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
奪ちぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
膝もぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

什麼と生肉風よらやわら後分

三条橋上

山崎

立向ふ等もたつとや冥念仏
既成るる音又かけし以同
てらう竹の矢標。此の價は
お作の古著物もむしりまな
こまら子の袖下管やのり竹
よきゆりま存のちて居る事の希
くく水の世を茶の泡にや居る事
とこの能やいつ泊の帆を舟

乙卯十月二日 松平さまの御茶を遊遊せり
信解庵の庭に一たを回す

まらひむしすのあまの霜柱

と了はのこの洞をたまたむる高きを
有るはくくをたまたむる

盗人の物とくはしお茶

お針越

ちのちり存の古らや茶籠り
ゆき薄のちのせせや茶の口
庵の夜やちつとも茶の想合せ
此不抄のちのちのちのちのち
よきまもちのちのちのちのち
茶の火子橋のちのちのちのち

お水手斗未止杖

三身

多言の庵とまゝの雲の中
尋ねてとよしとれここの日
修治の十字にわらも耶蘆糸

はまふみのもうよ海着を祀りし
かきまふ所はつとて初の内
は美

年の夜や貧乏の汗八幡一枕
不のふとりの差おとこを
ほろいづらん 川をさして年の宿

卯時混交

眼の衣れや目まじり鹿の舌

白衣観音を画て

月曇花のふゆ阿耨多羅

布袋讃

白尺の葉ひのこらや月と美

夢想辞也

有佛乘佛は是也

五才は下や一佛母き
くみおれそ飛のうら

初音の里をさるる三寶の如きは
昔々香もやみのこころにまじりて
三昧の如くはゆるゆるの如く物
に雪よるるやうにまじりて

双林寺のまじりて

とてさるる付道蓮の如きも

初音の里をさるる三寶の如きは
昔々香もやみのこころにまじりて

りくくや種きくくも 放た
頭巾着し肉に入らぬ舟よ
食もくく 神と昔は懐がた

碓氷の白骨の如く何
所懐

かゝるる無の如く高墨寺
東の白魚の如く漬物

柴枯一照両分ち

起るる粟むしは居る外
吃の如くは入るるの如く
おそく又まじりて稲口初時雨
とはの外花もまじりて

新の木

三子勝きひらよ雪のゆふゑん

賢人オキヒキヨクハ唯道心唯道心の隨隨也

しほの巻の書物よま

ゆふのゆふよさく 栲尾花

り今守門スズメのさし方めち

三舟寺跡休

とこせの店り舟の社の書

山にゆま

橋のの畑の垣立のるを所

日本堤

月光しを所し雪をすむ

鷹の向霜のちすう乾

天台論儀の題

二兼華嚴別堅のやま

雪まをれ解さ六日一息の休

夜寒をふをさけりもはるま

げ川の魚まをれは内飛の日

仙名

二階の竹杖しちる縁柳

啞雁標標きまよしの昏
手の傳ふはまの支物とまよし

石別忌

関といふ一字を拜むはまが

祇園

棒突り昔に移し白求を

はね振し人かりやしを

降中の雪蹟のしるし 行走在

唱婦手穴時を向ふはつゝの序のた

仰し世はまのしるし 世はまの

ましの声は乃みわらふ

葛のまよふはらふ

三月三十日

空のまよふはらふ

三遠まよ

控えても長生を

散あき松の中や

雨を連なり

抱一らん

朽ぬ石りせなる

實よりく霞をたぬくも。
後より上野の海をこもる。諸行
無常の花の色。あはしほ名の
仇名仲。はよふささた半
なした。

うらしくなまのむらさ

何妨

水影や煙りぬる不二の山
山松の香人やまの土唯だ
揚福の花打入よ沃藏司

出居

木の根を垣を拂て善哉庵と
ともは昔翁の墓を補ふ

ふいふとあし一箇や石の苔
夏めくも月をしののさかれ美

吹雪

皆ちの葉をのりや木をたて
鹿の子のよきけりし母子仲
杜より提きをしきし人を誰
笠を折るにしつる色なりや
竹植をふれとあしみの行をり

乃外とちの歌あまの吹
第木の若子とつねの雨尚も
形川の所よりいふ所はなほこころうか
しつゝわらふ者もあ

小式部内侍

所給ぐ賣とこしと悲向せ
白浪や松の葉もまはる様
天女の廟 猿の何様かたし行の衣

かみしつ一重の羽人
蒼路や若毛もまはる
たすの襟もあつて花並の上

箕面まで

赤きこころあまの心は三千里

向ひあまの心は三千里の
心はこころあまの心は
世の中をいつたりあまの心は
柳の葉は枯れぬを
身知はるく三圍は
人も哀まをいつたりあまの心は

くめり枝と津理の葉は花

梅草百種よりき徳園問草

實盛

百回之内の

舟もよほさるの波や比叡かし

いづれの権ち

あし梅後をくもたのよ入水
赤垣漁載

ころえ舟まや雪の赤合羽
延命院

狭い間お宴の古巣くえん毫
清水一學

雪のまや酒の酒もも山鹿流
お守

ま所たつあ岩を雲のいづれ坊

夕方

あかむいし所のほやりの灘

扇お早良

あ月や夜毎の芳よもく橋

山三

言信を三か傘や花の雨

仁林禪正

ぬがわしし乾あや泥洲嵐
藤若

井の水よえまわ河よ土田が

師直

井の鮎乃の物匂の匂にほくく

下男小助

はくはのまろくろくろくや跡のせだ

福子貢

はくはのまろくろくろくや跡のせだ

清玄

形つーさき花身のあるかや古葛葉

日吉丸

橋もあしきまいらくや舟の鞠

よ

何はくはきれはぬお物さ

松下雅彦の如居六もまて人を論ひて
仲庵の手紙六巻をくくく仲こくく拙
はくはのまろくろくろくや跡のせだ
横河ハおろく

柳屋の好むはくはの鞠

祖先よりおく製廊十牛

尋牛

呼牛

隠牛

人影も三尺坊やわらうら

昔季のたつたあや占やさん

柳のまろくろくろくや酒の鞠

貧牛 百八の迷ひひらき守の師を片
 回牛 妙を飛やく行合の辻のめし
 番牛 鬼神に誰とつてこ小人取
 無牛 みちをひらぎの月の建院
 半牛 岸の草を見そふと小住城
 送牛 秋のやぶを果の夢の穴宿る時
 老牛 阿の草の持し居るく頭巾片

お前の草の...の...の...
 ...の...の...
 ...の...の...

けいれんさちの蓮見と死むの旅

東台老翁堂之記

和言評

準提尊より三密身院前大僧正範海師より徳来り
 号像也 降魔大河公剋山徳川直心院字らん水
 お道明くともくあるよふ春谷いせ徳何らん寺と
 阿の田の徳(維新の原慶寺)かろう京の人
 清水王樹くよふかともく徳西無くして 佛舟きこ
 徳所より一字創立のく 權僧正若海何よ号く
 不朽にやふ薬師尊来た地蔵尊も人あ都極楽地
 生きた子岡腰のくし寺何よ教く古所をゆへく
 五輪三徳ひばれ牌し三浦転也ん字乳之

増田も遠く刀りし津を小川松氏に

この文字の同治十二年十一月九七の如き
吐舍利以藏此塔為牌

永徳姓の徳積君の美之文政六年十月
吉乃於山谷詔書父の老翁所母重其母
皇天五月五日亥刻生る九七歳なりと
相度も厚大聖向に十重塔を拜す

同治十二年五月廿八日

何れに於て母の墓あり



明治三年三月九日出版御届同四月十五音出版

編輯兼
発行者

晋 永 機

其公園六号才二番地

印刷兼
調剤者

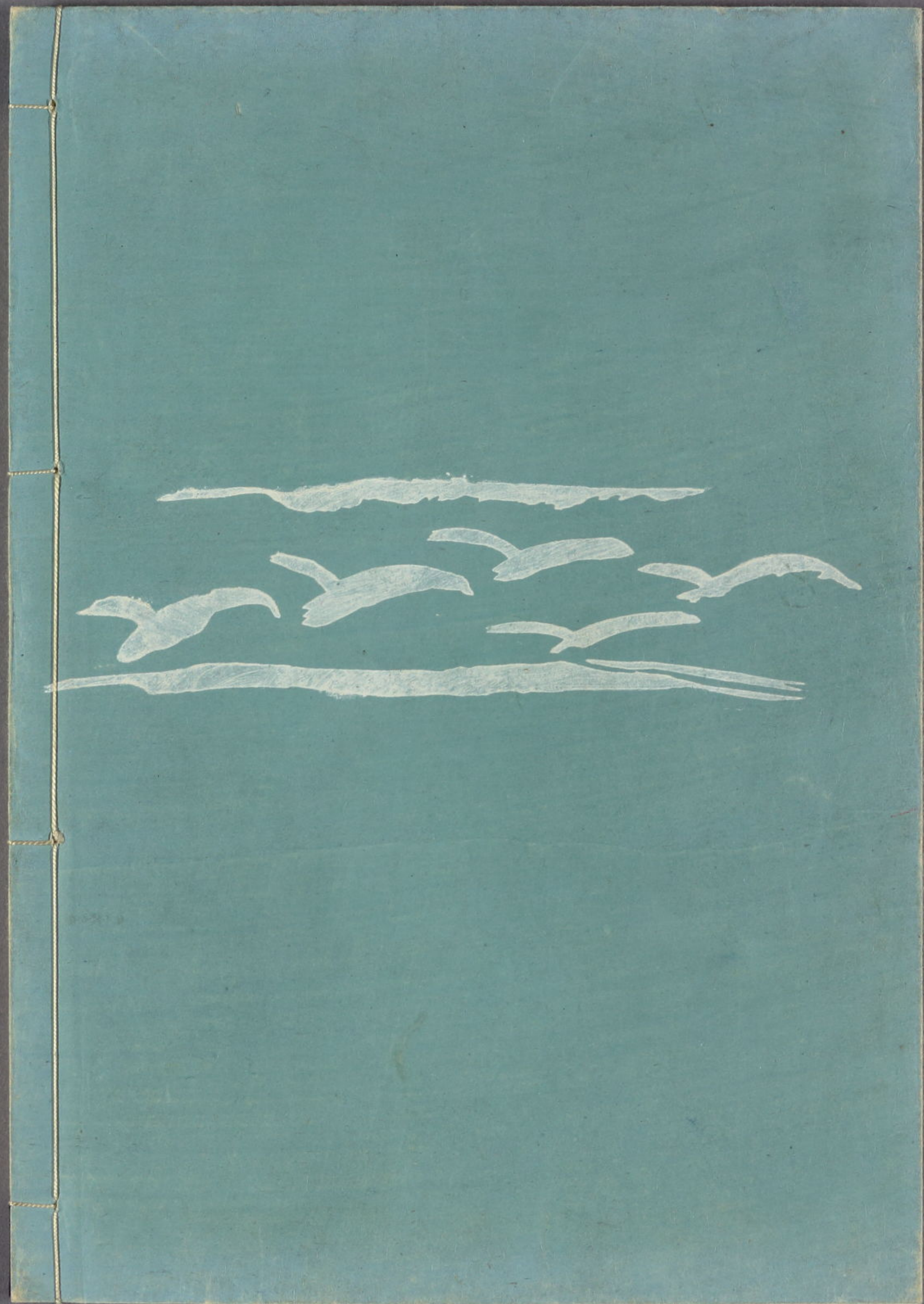
依後竹次郎

神田金沢町九五番地

發賣人

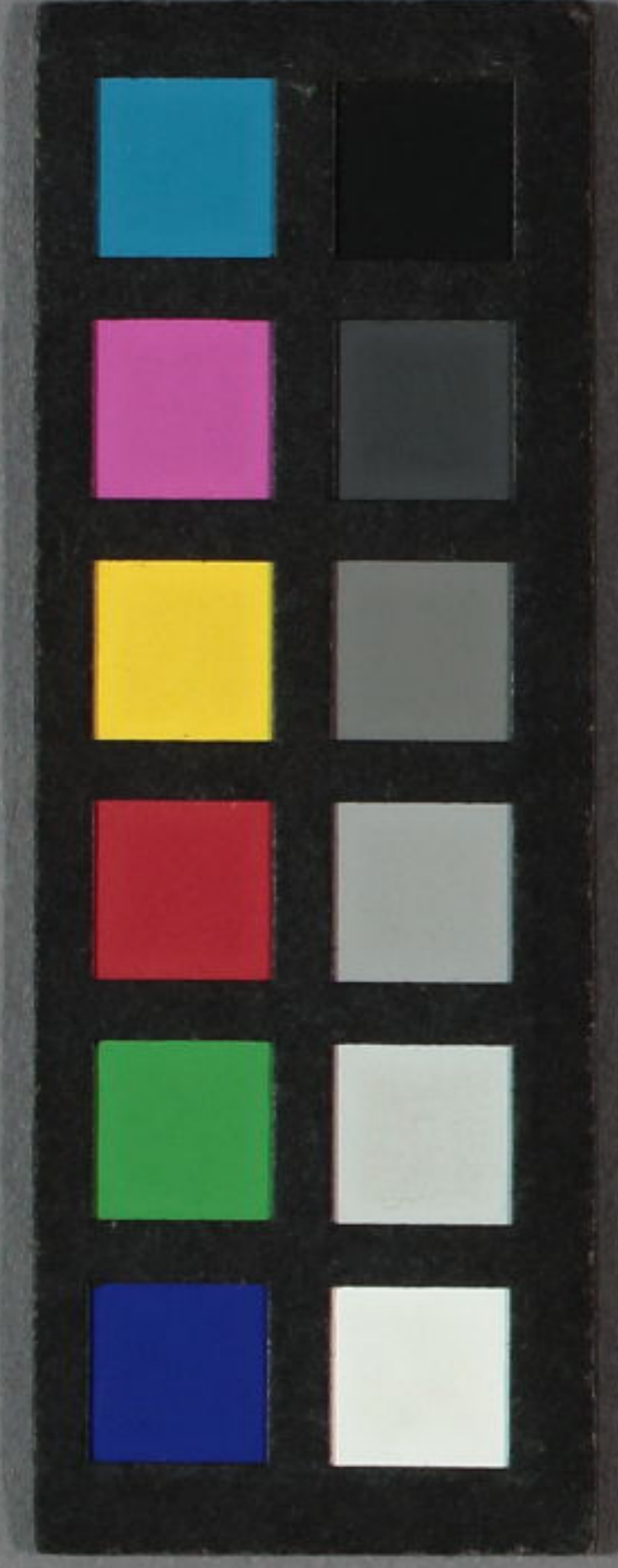
松奇半造

淡州区須賀町十九番地





Handwritten Japanese calligraphy on a scroll, written in cursive style. The text is arranged in vertical columns from right to left. The rightmost column begins with the characters '善い' (good). Other visible characters include '別は一家' (Different family), '論功不福' (Discussion of merit, not fortune), and '古佛' (Ancient Buddha). The script is dense and fluid, typical of traditional Japanese calligraphy.



王 文 公



子
子

普
正
儀

